



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	翻訳者の悲喜こもごも
Author(s)	山吉, 智久
Description	日本基督教学会北海道支部2018年度公開シンポジウム「聖書『聖書協会共同訳』（近刊）：その特色と意義」。2018年7月16日。北星学園大学, 北海道。
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録, 5, 45-54
Issue Date	2021-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95141
Type	conference paper
File Information	jscsh_005_45.pdf



翻訳者の悲喜こもごも

山吉 智久

日本聖書協会より 2018 年 12 月に刊行が予定されている『聖書—聖書協会共同訳』は、2009 年に「翻訳方針前文」が採択され、2010 年より具体的な翻訳作業が開始されているとのことです。私自身は当初、この聖書翻訳のプロジェクトが進行中であることは、風の噂という程度で知っているに過ぎませんでした。2005 年夏より 2013 年の年末まで、ほとんど日本に帰国することなく南ドイツの片田舎の大学町に滞在しており、そのような情報に直に触れる機会を得なかったのです。2013 年の年末、日本に帰国したものの、当初は教育研究機関等での専任職を得ることができず、東京・銀座の教文館にて、渡部満社長のご厚意により、週に 3 日、翻訳・編集のアルバイトをしていました。するとある日、同ビルに入っている日本聖書協会の島先氏よりお声かけいただきまして、2014 年 4 月に、旧約聖書原典翻訳者の末席に加えていただくことになりました。従って、この聖書翻訳事業のごく末端を、しかも後乗りの形で担った者に過ぎませんので、プロジェクトの全容を把握している立場にはありません。

それでも、こうして皆さまに、新しい聖書翻訳についてお話をさせていただく機会をいただきました。そこで私からは、翻訳、特に聖書翻訳が持つ特有の難しさと、そもそもの翻訳というものの在り方について、また新しい聖書翻訳の特徴を、パイロット版を手がかりに考えてみたいと思います。



聖書翻訳が持つ特有の難しさ

まず指摘したいのは、翻訳、しかも聖書の翻訳が持つ特有の難しさについてです。事は聖書に限りませんが、翻訳は、個人的な目的のために行うものを別にすれば、流通に乗せて、書店等で一般に販売されることを念頭に置いています。すなわち、それをできるだけ多くの方に手に取ってもらい、読んでもらう必要があります。出版というビジネスの世界では、翻訳が「難解」であると、売り上げが伸びないという危険を伴います。翻訳が「受け入れられる」、具体的には、「売れる」必要があるのです。そうなりますと、翻訳者や翻訳委員会は、最新の慣用的な表現や知見を取り入れることはしますが、訳文はできるだけ「保守的」なものに保つという重責を負っています。

加えて、聖書は、一人静かに読むだけでなく、教会その他にて、複数人で共に読むことを前提にしています。とりわけ今回の聖書翻訳事業は、教会その他の礼拝の場で使用される点を重視しているようです。礼拝で朗読される聖書を目的（スコpos）としていることです。すなわち、訳文を「耳で聞いて理解できる」必要があるのです。これは、同音異義語を多く持つ日本語では、特に難しい目的設定と言えます。「かわる」という言葉1つとっても、（代表の代で）「代わる」、（両替の替で）「替わる」、（変化の変で）「変わる」とあります。

日本聖書協会による聖書翻訳は、『明治元訳』（1887年）、『大正改訳』（1917年）、『口語訳』（1955年）、『新共同訳』（1987年）と、約30年ごとに改訂あるいは新訳が行われてきたようですが、この度の『聖書協会共同訳』事業について、発表されている原典翻訳者のリストを見て、非常に驚いたことがあります。それは、原典担当者の数が、旧約で21名、新約で14名となっていることです。旧約

聖書と新約聖書の分量を比較すると、旧約聖書の方が、ページ数にして約 3 倍も多いですから、この人数で作業するということは、単純に考えて、旧約の方が約 3 倍の時間がかかるか、あるいはそれぞれの旧約担当者が、新約担当者よりも約 3 倍の速度で作業を進めないと、旧約新約同時に翻訳を終わらせられないということです。私のような末端の者にまで、しかもかなりの後乗りの形で声かけられたことを考えると、少数の優秀な人々を厳選した、とは到底思えません。聖書の原語から別の言語へと言葉を移し替えるという、きわめて基本的な、しかしあらゆるものの出発点となる作業を担う人材の不足という点において、日本の神学界は、特にこの数十年の間に大きく後退していると言わざるを得ません。こうした事態はしかし、今後は、ますます悪化の一途をたどるでしょう。

昨今の日本の（あるいは世界の）教育事情に目を向けると、後進の育成という点に関して、暗澹たる思いに襲われます。かつてないほどに短期間で成果を求められるようになっている風潮は、神学分野でも変わりません。神学を本格的に学ぶためには、旧約・新約聖書学、教会史、組織神学、実践神学といった専門分野に入る以前に、最低でもヘブライ語、ギリシア語、ラテン語といった古典語のみならず、英語、ドイツ語、フランス語といった現代西欧語の習得が求められます。特に言語を身に付けることは、ごく一部の天才的な例外を除けば、長い時間をかけて、ようやく形になるものの最たるものではないでしょうか。しかし今は、そのような時間を待つてはもらえません。今から 30 年後、2050 年頃の日本に、聖書の原語をしっかりと学んでいる人が、果たしてどれくらい育っているでしょう。

そのような事情ですから、今回の聖書翻訳事業は、原典からの翻訳という意味で、おそらく最後の日本語訳になるのではないだろうか、と推測しています。



翻訳についての考え方

聖書は、これまでも既に数多くの日本語訳が行われてきました。なぜ、そこにまた新たに別の日本語訳を加える必要があるのでしょうか。それは、これまでに出ている翻訳のどれ一つとして、「完璧」なものではないからです。ここに込めた意味は、単純に、これまでの翻訳に正確さを欠く「誤訳」が含まれているということだけではありません。

そもそも、「完璧」な翻訳というものが可能なのでしょうか。すべての言葉には、「意味の幅」があります。すなわち、ある言語の 1 つの言葉に対して、別の言語の中には、それに対応する訳語は 1 つでなく、複数あるということです。翻訳するときには、それらの候補の中から、より相応しいと思われる 1 つだけを選択しなければなりません。翻訳とは、言い換えれば、ある 1 つ以外の候補・可能性を排除する行為です。翻訳という作業には、すなわち、必然的に解釈を伴うのです。何度も繰り返し、新しい翻訳が行われ、別の翻訳が生み出されることによって、わたしたちは、それらを読み比べることができます。こうして、1 つの翻訳では再現することができない、原語の言葉が持つ意味の多様性を垣間見ることができるようになるのです。

・アーダーム (*ādām*) : 「人」か「アダム」か

分かりやすい例を見ましょう。まずは、創世記 2-3 章のいわゆるエデンの園の物語です。「新共同訳」と「聖書協会共同訳 (パイロット版)」を並べてみました。注目すべきは、「人」という言葉です。これは、ヘブライ語原文では、アーダームという言葉です。新共同訳では、2 章では普通名詞の「人」として訳されています。それが

3章以降は、「アダム」となっています。3章以降は、同じ語を固有名詞と捉えているということです。一方の聖書協会共同訳では、2-3章で一貫して「人」とされています。ヘブライ語原文を見ますと、2-3章に出るアダームの語は、ほとんどが冠詞付きです。すなわち、この語は普通名詞として、概念としての「人」を表しているのです。新共同訳で、3章以降にこれを固有名詞の「アダム」として訳す文法的な蓋然性はありません（内容的に考えて、禁じられた木の実を食べた後だから、ということでしょうか）。

新しい翻訳は、この知見に則って、アダームを固有名詞の「アダム」とするのは、4章 25 節が最初です。ここで初めて、アダームが冠詞を伴わなくなるからです。創世記 2-3 章の物語は、すなわち、始めから終わりまで、「アダム」という、ある特定の一個人についての物語ではなく、現代のわれわれをも含み得る、「人間」全般の事柄として語り出しているということなのです（但し、2-3 章の文脈の中でも、マソラ本文では、アダームを冠詞なしで理解している箇所があります [3:17.21]）。しかし、いずれも前置詞を伴っており、子音字だけのテキストでは、この冠詞の有り無しの判断はできません）。

・イーシュ (*'iš*) : 「男」か「夫」か、イッシャー (*'iššāh*) : 「女」か「妻」か

同じ創世記 2-3 章の文脈で、もう 1 つ、解決が容易ではない問題をご紹介します。それが、「男」と「女」という語についてです。「男」を表すのは、イーシュという語です。この語は、「夫」をも意味し得ます。また「女」を表すのは、イッシャーという語で、これは「妻」をも意味し得るのです。そうすると、これら 2 つの語を訳出する際には、常に「男」か「夫」か、また「女」か「妻」かを判断しなければなりません。

新しい翻訳では、「人」（アーダム）と関わるイッシャーについては、「女」から「妻」へと変更されています。それらの多くは、2人称男性の人称接尾辞「あなたの」を伴うものであり、妥当な変更であると思います。特に2章24節の「女」から「妻」へ、3章16節の「男」から「夫」への変更は重要です。これにより、創世記2-3章の物語が、ある一組の夫婦の関係について語るものであることが、はっきりと示されることになります。



コンコルダンスが活きる翻訳

ある言葉について、それに一般的に対応する訳語を充てるだけでは、意味が通じる文にはならないことが少なくありません。語彙の関連度が低い言語間で、機械的な翻訳が意味不明な文章になってしまうことの所以です。そこで、翻訳において、常に議論の的となるのは、「直訳」か「意訳」かの問題です。

この問題に対して、万人を納得させる究極的な回答を用意することはできませんが、私は個人的に、原語の単語は、できるだけ同じ言葉で訳出した方が良くと考えています。そのようにしておけば、それぞれ個々の箇所を読んでいるときは気付きにくい、文書内、文書間での言葉による結び付きを発見することが容易になります。当該箇所では理解が難しい場合でも、それ以外の文脈と比較や類推を行うことによって、より深い理解へとつながる可能性があるからです。

・ラーシャー (*rāšā'*) : 「悪しき者」、ツァッディーク (*šaddīq*) : 「正しい者」

新共同訳は、かなりの頻度で、ラーシャーという語を「主に逆らう者」、その対義語であるツァッディークという語を「主に従う者」

と訳しています。一例として、詩編 11 編を挙げてあります（詩 7 編も参照）。

ラーシャーの語は、しかし、共同体の命、秩序を脅かす者（エレ 5:26, 箴 12:6, 詩 119:95.110, 140:5.9 など）、あるいは罪無き者の命を奪う者（サム下 4:11）を表します。時に、「貧しい人」（詩 37:14, 82:4）や「正しい人」（詩 11:2, 37:12.32, 箴 24:15）を犠牲にする者のことです。新共同訳では、このような悪しき存在とは、神に対してのものであると「解釈」されました。対義語のツァッディークも同様です。しかしながら、これらの語は、必ずしも神との関わりを述べたものではありません。ツァッディークは、人間のみならず、神の形容として用いられることもあります。詩編 11 編 7 節はその 1 つです。新共同訳では、ツァッディークについて、あるときは「主に従う者」、あるときは「正しくいまし」と、同じ文脈で共通して現れる語句が、全く別の言葉になっており、それらの間の相互関係に気付くことができなくなっていました。

新しい翻訳では、ラーシャーは「悪しき者」、ツァッディークは「正しい者」となっています。おかげで、授業や礼拝の際、これらの単語が出る度に、「これは常に神との関わりだけを指す、神学的な意味ではない」との説明を加えずとも済むようになります。

ある一つの箇所だけではよく分からない言葉や表現が、別の箇所との比較によって、その意味が立体的に、多角的に見えてくる、そういった発見こそが、聖書を読むときの醍醐味の一つではないでしょうか。



新しい翻訳にも残る問題

最後に、新しくなった翻訳にもなお残る問題について、いくつか指摘しておきたいと思います。

・アーザブ (*'āzab*) : 「離れる」

一点目は、創世記 2 章 24 節です。新共同訳では「父母を離れて」、新しい翻訳では「父母を残して」とされている部分です。「離れて」あるいは「残して」のヘブライ語原文はアーザブという語が用いられています。これは、放擲・放棄を表す動詞です。神と民との関わりにおいて、イスラエルの民がその神ヤハウェから背き、他の神々を崇拜するさまを描く際、このアーザブは頻繁に現れます(申 28:28, 31:16, ヨシュ 24:16.20, 士 2:12.13, 10:6.10.13, 王上 9:9, 11:33, 王下 21:22, 22:17 など)。民による神の放擲を表す術語の 1 つなのです。また、詩編 22 編は、「わが神、わが神、なぜわたしを見捨てたのですか」と、神から放擲された状況にある人の嘆きで始まります(2 節)。この「見捨てる」の部分がアーザブです。

これらの用例を考慮に入れば、創世記 2 章 24 節の文言は、夫たる男が、その父母を放擲して、妻たる女と 1 つとなる、すなわち親子の関係よりも夫婦の関係を重んじるというところに要点があることが分かります。古代イスラエルにおいて、男女が夫婦関係を築くことは、妻たる女をその家から切り離し、夫たる男の家に組み入ることを意味しました。まさしく、2 章 24 節で言われていることの逆です。そんな中で、この言葉を書き記した作者は、夫が血のつながりのある自分の親を捨てて、他人である妻とつながることに理想の形を見た、と言えるのではないのでしょうか。

・ヨーム・エハード (*yôm 'əḥād*) : 「一日」

もう一点は、創世記 1 章 5 節後半の文言です。そこには、「夕べがあり、朝があった。第一の日である」とあります。実は、この訳文には、大きな問題があります。他の言語と同じく、ヘブライ語の数詞にも「基数」と「序数」があります。1、2、3 という具合にあるものの数量を表す際には「基数」、1 つ目、2 つ目、3 つ目という具

合に順序を表す際には「序数」を用います。1章5節で「第一の」と訳されている部分の数詞は、一見すると序数のようですが、ヘブライ語原文ではエハードという基数になっているのです。すなわち、「夕べがあり、朝があった。一日である」というのが直訳です。興味深いことに、二日目以降、「第二の」、「第三の」とされている部分は、しっかりと序数が使われています。これは一体どういうことなのでしょう。1章5節後半では、ある意図があつて、敢えて序数ではなく、基数が使われているのではないのでしょうか。

その手がかりと思われるのが、「夕べがあり、朝があった」という表現です。これは、二日目以降、「第何の日である」と言われる前にも、毎回必ず繰り返されています。「夕べ」というのは、光から闇へ、昼から夜への変わり目を表します。「朝」は、それとは逆に、闇から光へ、夜から昼への変わり目です。地球上では、光と闇、昼と夜の交代が定期的に繰り返されています。このリズムを基にして、わたしたちは一日というものの長さを定めているのですが、よく考えてみれば、何度朝が来て、何度夕べが来たら一日とするか、ということの絶対的な基準はありません。あくまでも、わたしたち人間による共通の約束事なのです。

1章5節後半で行われているのは、まさしくこの一日の長さの規定であると考えられます。昼の間、神は創造の業に勤しみます。それは人間と同じく、労働の時間です。そして夕べ、日が沈む頃には仕事を止めます。「夕べがあり、朝があった」というのは、日が暮れて、もう一度日が昇ってくるまでの夜の時間を表します。すなわち、一回の昼と一回の夜が経過する長さをもって、「一日」と言われているのです。こうして最初に一日の長さが規定されているが故に、二日目以降は、「第何の日」と数えることができるのです。

『聖書一聖書協会共同訳』は、わたしたちが過去 30 年ほどの間

に培ってきた知見の証として、鉄の筆と鉛によって歴史に刻まれることになるでしょう。しかし、聖書の翻訳に「完璧」はあり得ません。それでもなお、それだからこそ、わたしたちは学びを止めることなく、聖書と向き合い、これを翻訳し続けるのです。

(やまよし・ともひさ 北星学園大学准教授)